

# 明和六年南比内二井田村御答書帳について

高橋秀夫

(一九八二年十月三十日受理)

## 一 はじめに

本稿は題名の帳簿についての紹介を意図したものである。これは当時秋田郡二井田村(現大館市二井田)の一関家のもので、現在東京の国立史料館架蔵になっている。

これまでの秋田藩の研究にあつては、あとでのべるように、この種の性質のものは紹介されてきていなかったように思われるので、この種の資料から汲みとれる内容にも注目すべきものもあるので紹介するしだいである。この帳簿の作成された目的は冒頭にあるように、「先頃、藩が親郷肝煎と親郷から「長百姓」、「小百姓」一人ずつを呼集め、村のこれまでの「難波」の様子を直接聞きただし、なお書面をもって、あとで申出るようにと命じたのにたいする一親郷二井田村の上申のための草稿とみられるものである。年代はすこし後になるが寛政六年(一七九四)の領内六郡の親郷の数は六六であるから、各親郷から三人ずつという約二〇〇人が呼び集められたことになる。

管見のかぎりでは、この時期までは、藩が領内全体からかかる形で参集させたということはなかったようであり、これは、この直前に宝暦の大凶作、銀札仕法による経済混乱、御家騒動と、藩政の動揺がはなはだしかったこともあり、このようなことをおこなったものとみられるが、なお今後の研究の深化を待ちたい。紙数の都合上、問題の多くに言及できないが、いくつかの問題点をあげておきたい。

これまで秋田藩の研究にあつては、貢租制度についての制度史的的研究はあまり、農民の貢租負担の一般的な原則などについて、あきらかにされてきていることは周知のとおりである。この史料からは、一八世紀後期の明和六年(一七六九)前後の時期の、村請けを軸としての村や農民が負担する、制度的な表面上にはあらわれないような負担などの実状がよく示されていることである。またこの期の足輕の地方知行による負担や、諸役人の廻在にともなう「迷惑」

についてもいくつかの興味ある論点が表示されている。またこの二井田村で、この数年前の宝暦期に、安藤昌益が死亡したとみられ、注目をあつめていることもあり、若干ずれるがこの期の村や村民の状態を知る上での一資料としても意味がある。

以下に資料をのせるが、紙数の都合上、先に発表した拙稿(小沼洋子との共著)「阿仁銀山廻米についての覚書——領国市場の側面——」(秋田高専紀要 第一四号、一九七九年、三—四頁)で紹介した、鉾山や能代廻米の諸負担をのべた部分は省略せざるを得なかったことを了承いただきたい。

## 二 史料

(表紙)

明和六年  
南比内二井田村御答書帳  
丑

乍恐書付ヲ以奉申上候御事

先頃六郡親郷肝煎并長百姓人、小百姓人宛被召登、村々は迄難波ニ及候次第御聞及ニ付、此末右難波相省、御百姓共之ためニ相成候様ニ御演説之上、御書付ヲ以被仰含、難有仕合ニ奉存候、依之ニ右御ケ条之外ニも難波ニ相成候儀、無思慮奉申上、尤是迄致駟来候儀ハ何儀ニ而も御糺不被成置、已後之助ニ可被成下被仰含ニ御座候故、乍恐是迄之儀ハ勿論、私

共存知付之儀、乍恐左ニ奉申上候御事

覺

一 毎年為年礼、肝煎・長百性、又ハ小百性同道ニ而御代官ハ罷登り候ニ付、隨而惣御檢使役・諍馬役・林役等ハ年始祝詞相勤候由、右ニ付音物等之物入、又ハ道法り遠近ニ随物入、久保田逗留中之物入、惣而掛り物、親郷ハ勿論支郷迄割合為指出、内々及迷惑ニ候趣相聞得候

当村寄郷共ニ是迄段々御代官様江御年始相勤候得共、年ニ寄り御代官様御替り等之節ハ、寄り郷村々肝煎惣代ニ親郷肝煎罷登候年も御座候又ハ長百性老人罷登候年も御座候、又ハ飛脚ニ而書状ヲ以相勤候年も有之候得共、御年礼之御事故、輕キ樽肴一ト通りニ而相勤來申候、尤右道中遺、久保田逗留遺、樽肴代等ハ寄郷惣代之事故、右諸遺之分ハ三ヶ壺ハ村割、三ヶ二ハ高割ニ而古來ハ相勤來由候、外役人様中へハ御年始之書状壺通りニ而、音物等指上候事無御座候故、寄り郷杯へも代割合と申候ハ不仕候、尤肝煎罷登り候節ハ四貫文程、長百性罷登り候時ハ貳貫五百文之割合仕申候

一 所持支配郷村々、又ハ其扱所村々、所扱之家來役人江久保田並ニ相勤候ニ付、物入有之、内々及迷惑ニ候趣相聞得候

当村之義は大館様御支配、先年ハ正月二日、三日兩日之内肝煎罷登り候節も有之、又肝煎病氣等ニ御座候得ハ、長百性斗り罷登り御年礼相勤申候

依テ御家來様中、御代官衆共ニ、御老人江五拾文宛御酒代ニ而御年礼相勤申候、其外之御役人様中へハ酒代なしニ御礼斗相勤申候、肝煎罷出候節、諸遺共ニ五百文斗ツ、入方ニ相成候、右錢当村之惣高割ニ仕候、菟角物入之方ニ而迷惑千萬ニ奉存候

一 御金蔵三ヶ年目御勘定ニ親郷肝煎罷登り候節、長百性・小百性同道ニ而御勘定指出シ相濟候上、御金蔵役人江振舞等相催シ、又ハ土産之品酒肴等相送り候ニ付、物入有之、且久保田逗留數日ニ及候而ハ、猶以物入有之、及迷惑ニ候趣相聞得候

右は寄郷共ニ惣代当村肝煎老人罷登り來申候、年ニ寄り御振廻指上ケ

申事も有之、近年ハ御用御取込ニ而、右御用尺取不申、日數長逗留ニ而物入増ニ罷成迷惑仕候、併御皆濟序ニ相勤候故、支郷共ニ右御用之分ニ四貫文程之割合仕候、尤御蔵高へ割付、当村分式貳貳百文程、当村にて御蔵高割ハ斗わり付候事

一 御皆濟之節、物入之分、親郷御皆濟も支郷も高割ニ而不少割合指出候ニ付、致迷惑候趣相聞得候

当村寄郷共ニ御皆濟壺通入方、往來逗留諸遺共ニ、古來ハ御蔵高二而錢貳拾貫文之割合仕相勤來申候、近年ハ長逗留ニ而右錢不足仕候得共、不足所之親郷相重損亡ニ罷成り申候、右定之外ハ壺錢たりとも支郷江も郷中へも割付不申候、右錢当村御蔵高之貳貳百文指出、村々惣高割ニ仕候事

一 御檢地役廻在之節、逗留宿江五七里隔候村々も肝煎案否為見廻之、音物持參致候由、右物入等も郷内物入ニ相掛り迷惑ニ及候趣相聞得候

右之儀ハ御用為御窺之遠方江も參候而、御見廻申上候事も有之候得共、音物等持參致候儀ハ無之候

当村御用御取仕廻御立之節ハ、当村有合之物ヲ以御土産等も指上候事も御座候得共、御受納無之時も問々有之候、右品物は錢立ニ致、当村惣高わり付申候事

一 五斗米代、御郷役銀上納之節、物入有之迷惑致候由相聞得候

右之儀ハ上納文銀壺勿ニ付、錢貳文当テニ而酒代指上、外ニも年ニ寄り酒肴、或ハ御屋喰等指上候事も有之候、御郷役銀ハ仮御手形ニ而御出シ、翌年御皆濟ニ罷登り候節、御本手形ニ御引替被下候故、其節又々御本手形壺枚ニ付、錢七八拾文宛御酒代御取被遊候、外ニも酒肴御屋食等被仰付候年も問々有之候、殊ニ右御用申上候ニハ、御役所ニ居候小者相頼申上候事故、小者江も酒代不致候得ハ、取次尺取不申候故、無抛小者迄も酒代仕申候、併去暮御代官様御思召有之、右酒代ハ文銀壺勿ニ付壺文式掛りニ、御本手形壺枚ニ付三拾五文ニ致候様ニ被仰付候、右之通りニ而相濟申候得共、例年ハ御酒代減シ申候故、猶御用尺取不申、長逗留ニ罷成甚々迷惑千萬ニ奉存候、当村御郷役、

五斗米代上納仕候諸掛り物、乍恐左ニ奉申上候

一文銀貳貫八百目余 去暮上納分

右御酒代三貫三百六拾文、但壹匁ニ付壹文貳歩つ、

外ニ六百文 小走立酒代

同四百拾匁余 去暮五斗米代上納分 此御酒代四百九十貳文

外ニ五拾文 小走立酒代

外ニ六百文

右ハ進上納被仰付候ニ付、兩度罷登り候道中遣、久

保田逗留遺共ニ

同壹貫五十貳文

右銀三貫貳百目程上納致候、掛ケ残り之由にて指上候分

拾壹貫五百五拾四文

右之通り之掛ケ残り而、甚迷惑ニ奉存候、右錢當村にて高割にて指上候

一御用ニ付往来之面々、於駅場に御刻状之外、助人馬指出シ、又ハ訳柄ニ寄り定式程之助夫昼食酒等指出し、或ハ倍臣之者才足等ニ罷出往来之節、彼は無心等ニ預り候ニ付、不少物入有之由、并私用之書状、又ハ品物等仕送無賃錢被相頼仕送り之儀も有之、是又年中之失望不少有之、迷惑ニ及候趣相聞得候

當村之儀ハ扇田村と両村ニ而、壹ヶ月二十五日替りニ御伝馬相勤申候、

然ハ上ミハ十二所町江道法り三里程、下モハ綴子村江五里程之所、其

外近在共ニ相勤申候、當村之儀ハ駄馬過之在所ニ御座候故、壹駄

之御荷物附之馬迎も無御座候得ハ、多分ハ壹駄立平馬貳疋、外ニも歩

夫指出候事も有之候得共、是ハ私とも勝手ぞヘヲ以右之通願申上指出

シ申候、尤御役柄ニ寄り時分頃ニも至り候得ハ、酒等指上候事も有之、

又ハ御昼食等指上候時も御座候得共、郷中御近付之衆様斗ニ御座候、

御刻状之外之書状等被相頼、仕送り候事ハ間々有之迷惑仕り申候、御

催促之往来ニハ奉公入目等ニ相成候義無御座候、十二所御登り被成

候御金蔵御番之衆ハ、行帰リニハ御馬拾四疋斗宛、年中ニ兩度つ、御

仕送り仕、別而迷惑ニ奉存候

一御用ニ付往来之面々、一宿又ハ逗留之節、御賄指出候ニ、近年別而右御賄ニ付物入増有之、郷中ハ不少割合指出及迷惑ニ候趣相聞得候

御賄壹升ニ而相勤兼候故、御老人前御役柄ニ寄リ五十文ハ百文、百五拾

文、貳百文、三百文迄尻打錢相定指置、去一ヶ年御通り様□□□取扱尻

打錢都合式拾四貫文位、當村にて惣高わりニ仕候

一御代官、御檢地役廻在之節、多分肝煎方ニ而宿致候ニ付、右居宅手入、

又ハ遺物雜具等大方毎年新規ニ相調、或ハ上下之分、半紙、鬻付、本結

たばこ等、其外品々物入等有之、年中之失望一郷ハ勿論、支郷江も割合

指出させ候ニ付、迷惑ニ及候段相聞得候

右御宿錢ハ肝煎居宅ニ不限、長百性共ニ相成之居宅所持之者共、替り

替り御宿申付候得共、何ニ而も郷中ハ手伝等指出候儀ハ古来 無御座

候、半紙、鬻付、本結等指出候儀も無御座候、たばこハ御下々江有合

之たばこ是迄指出申候

一久保田近在江、諸士又ハ下仙北御給人等小鳥狩等ニ罷越、百性家被借候ニ付、難申分ヶ次第も有之、無抛居宅賃置候ニ付、致迷惑候趣相聞得候

當村ニは已前ハケ様之儀無御座候

一在々御馬取御用、又ハ御鷹投餌御用、其外御餌刺廻在、并御鷹餌納方

等ニ付、失望有之、迷惑ニ及候趣相聞得候

當村ニハ馬持立候者も無御座、御鷹場も無御座候、尤御鷹飼鶏ハ年々

三月十日納ニ被仰付上納仕候所ニ、道法り三十里御座候故、随分鶏吟

味仕為相登候而も、途中ニ而落鳥、又ハやせ鳥ニ罷成り申候ニ付、御

定法之寸方ニ間ニ合兼、切鳥ニ罷成申候故、右切鳥之分ハ久保田ニ而

相調上納仕候ニ付、不少物入増、猶又鳥請負被居候人足共江酒代不足

ニ仕候得ハ、弥々切鳥余計ニ付物入相増迷惑ニ奉存候、乍恐此儀ハ生

鳥之分ハ無残り上納ニ被成下、やせ鳥等ニ而不足仕候分ハ御割増被仰

付候共、切鳥無御座候様ニ被成下候得ハ、御百性共難渋相省相助り申

御儀と奉存候、當村寄郷共ニ取集四拾三羽上納仕候、右之内當村分十

五羽ニ御座候、右掛物種切代壹羽ニ付式十文つ、足代壹羽ニ付百三

拾文つ、都合壹村ニ付百五拾文つ、此錢合式貳百五十文指出し、

年々入方ニ御座候、右錢当村御高わりニ仕候、扱又年毎之様切鶏余計ニ相成候而、卷羽ニ付三拾文位斗つ、過割付仕、迷惑千万ニ奉存候  
 一下筋村々津整様御通り之節、御用筋ニ付、無用之失墜有之迷惑致候段相聞得候

当村之儀ハ綴子村上下合人馬相詰申候、寄郷村々之内も右村ハ相詰候村々も有之、又ハ御下り被遊候節ハ小繫村へ相詰候村々も有之候所ニ、御伝馬渡シ様江之御酒代ハ、本馬壹疋ニ付拾三四文宛指出し申候、尤人馬共ニ木賃ニ而、右泊り居申候、扱又古来と相違ひ近年ハ御供勢も殊外御減少ニ付、御上下被為遊候得共、人馬之割合ハ古来ニ違も無之不足不仕、御通り被為遊候後ニハ人馬余計余り通り申候、此義ハ乍恐加郷村々肝煎共相談ぞくニ割合為致、猶又御用人馬指出候ニも、加郷村々肝煎馬持共と立会、吟味之上指出候様ニ被成下候ハ、右之難渋相省可申と奉存候、次ニ近年ハ平均御竿ニ而御高減り之村々も有之所ニ、古来之有高ヲ以右馬當之割合指出申候ニ付、当村ニ而ハ御高四百八拾石余過高之分、人馬之割合相当り甚々迷惑千万ニ奉存候、乍恐此儀ハ何千石ニ而も、其詰郷之村々之内ニ而、惣有高ヲ以テ人馬割合指出候様ニ被成下候得ハ、御百性共相助り申候儀ニ御座候、当春中当村江相当り申候所ハ本馬三十八疋ニ而、此平馬七拾六疋、本歩夫式拾八人相当り申候而指出シ申候、此木賃諸遣四貫六百八拾文、外ニ肝煎・馬持・長百性、諸遣、御酒代指上候分共ニ貳貫文、都合六貫六百八拾文、外ニ飯米・馬飼料共ニ持参仕、甚々迷惑千万ニ奉存候、右錢当村にて惣高割ニ仕候

一 漆木御取立之儀ハ何も心得之通ニ候所、木数相増候而ハ、右ニ随村々迷惑有是趣(御間及ニ付御尋ニ御座候)

此儀木数相増候上ハ見継役等も相増、猶御役人様中も御出、逗留日数にも相成候上ハ迷惑ニ奉存候、併此度格段之御役木ニ被仰付候故、右御仕法御取扱見不中内ハ、乍恐難渋筋相知不申候

一 六十六部并相對奉加、諸くわん進等之者、留置問敷旨被仰渡候得共、右之者為吟味及此方江申出候儀ニ付迷惑ニ及候趣有之、吟味ニ及兼能有候段相聞得候

右之儀已前々被仰渡候通り村々にても心付吟味仕、猶又入口御関所ヨリ怪敷者ハ町送りにて送り有之ニ付、近年ハ諸くわん進等も余計有之と奉存候、併御免許之諸くわん進、近年ハ別而余計ニ罷成、尤相對次第之奉加ニ御座候得共、村送り歩夫、其上宿等之無心ニ預り何共迷惑千万ニ奉存候

一 在々切支丹御調之節、帳面調方ニ寄り物入有之、迷惑ニ及候趣(御間及ニ付御尋ニ御座候)

先年ハ切支丹御調老通ニ御役人様御廻在被遊、外ニ向寄り之御所持、御組下御給人様被指添候故、甚々迷惑仕候所ニ、其以後御代官様御調ニ被成下候故、筆墨紙之外ニハ指たる物入と申ハ一切無御座候、当年ハ人老入ニ付三文八歩相当り、当村ニ而ハ惣人数五百七拾七人之分、三貫七百十三文之入方ニ御座候

一 収納米御蔵納之節物入有之、及迷惑ニ候趣御間及之段御尋ニ御座候

(略)

其外御材木増元米、能代江上納仕候度毎、前書之通り之掛り物之外ニ、又々御手形壹枚ニ付、百文つ、御酒代指上申候、甚々難渋ニ奉存候一給分物成小役銀相改之節、地頭ヲ請取方難渋有之致迷惑趣相聞得候

右御物成り之儀ハ御地頭ニ寄り米壹石ニ付、壹斗五升々式斗迄かん米相掛り申候、雜石ハ其年之高直成ル物斗余計ニ被仰付、下直之品ハ不被仰付候、小役銀ハ古銀壹匁ニ付九十四文々百十五文迄段々御地頭衆ニ寄り御請取被遊候ニ付、銀上納ニ願申上候得ハ、符人限りニ何処何分何リンと相違無之様ニ持参仕候ハ、請取可申候、右之内卷リン過不足等有之候而も、御請取被成下度被仰付候得ハ、是以御百性共手段ニ及兼候御事故、無拠御申掛り之通り錢ニ而上納仕候、其外御地頭衆へ御皆済ニ罷出候節、木代として、高壹石ニ付三拾文々四拾文迄御請取被遊候、是ハ何之御引米ニも相立不申候故、御申訳ケ仕候而も古来々之御格と有之、御間濟無御座候、併右木代と申候ハ、十二所御給人衆斗御取被遊候、大館御給人衆ハ御取不被遊候、右段々申上候通りニ而御百性共甚々難渋仕候、依テ乍恐難渋等ハ高拾石ニ付何程宛上納仕候様ニと品数ニ被仰付被下候は、御百性共難渋相省相助り可申

と奉存候

一 給分并ニ御足輕・御中間、知行所才そく之者、彼是難涉其中掛ケ取扱迷惑致候趣御聞及御尋ニ御座候

右御才そく之義、八月末方々御喰初と有之御才そく、夫方段々御上ミ之諸收納も相極り不中内ニ、御物成小役銀之御才そく参候ニ付、御申訳ケ仕候得ハ、日數之御逗留ニ而甚々迷惑仕候、依テ乍恐御地頭

衆之儀ハ、御物成小役銀共ニ、年々十一月晦日迄ニ上納仕候様ニ被成下候得ハ、御百性其難涉相省申候、其外御物成小役銀之先納被仰付候御方も有之、困窮之御百性とも甚々迷惑仕候、右御用之ためニも御家来衆御遣、其上御請致兼候得ハ御百性其御召等ニ而芳々迷惑千万ニ奉存候

一 諸士之内知行所江御暇ニ而數度罷越候ニ付、取扱迷惑致候趣御尋ニ御座候

右之儀ハ前条奉申上候通り御無心卷通り之御出ニ御座候而、迷惑千万ニ奉存候

一 盜賊・徒者召捕、其所ニ寄り才足御足輕付添罷越候節、一宿又ハ逗留之村々失墜有之、又ハ久保田江引付候節、途中於村々ニ、番人等出候ニ付迷惑之段(以下清ま)(御聞及御尋ニ御座候)

右之儀ハ当村ハ御伝馬郷ニ御座候故、是迄折々囚人罷登り申候、然ハ当村々綴子村迄ハ五里之場所相遠ク申事故、昼過ニ罷成候得ハ、多分御逗留ニ御座候故、囚人志人江ハ番人五人斗宛付置稠敷番仕候、其時之御足輕衆ニ寄り掛替之繩被仰付候ニ付、糸無之時ハ急段扇田村、大館町へ糸才足ニ罷越、甚々迷惑千万ニ奉存候

一 久保田近在并下仙北御普請御用杭、柴、筵、菰、芝、狩納方等ニ付、御定之外失墜有之、内々迷惑ニ及候段(御聞及御尋ニ御座候)

右之儀ハ乍恐御高割御郷役物ニ御座候故、道法り遠方之所江も上納被仰付候ニ付、右之品物上納仕候所ニ、近年ハ多分錢納ニ被仰付、品物不相応之錢被取申候、右品物ニ而上納仕度段願申上候得ハ、御聞届被

成下候得共、御酒代不足ニ候得ハ、種々之難ヲ品物江御付、御請取不申候ニ付、無拠不相応之御酒代等指上候時も有之、多分ハ右之通り之難涉故、錢ニ而御申掛次第上納仕、甚々迷惑千万ニ奉存候

一 吉凶ニ付、其所ニ寄り座當、食食大勢集り来り理不尽之申聞有之ニ付、取扱迷惑致候段(御聞及ニ付御尋ニ御座候)

乍恐右之義ハ法事時濟等致候ニも聞及次第集り来り、客門前之膳菜物ヲ請、其上錢ハ其者身帶不相応之事申掛仕、婚禮等之節ハ纏々之暮シ致候者江も罷越候而、右之通り之申掛、至極迷惑ニ奉存候、右之儀ハ御町方ニハ配當ニ而相濟候得共、在々ニハ配當と申儀無御座候故、難涉ニ相及申候、是ハ乍恐位致候座當ニハ老人ニ付何程、又位不致座當江ハ老人ニ付何程と、余り御百性難涉ニ不相成様ニ御積りニ候、婚禮等之節ハ指出候様ニ、又法事等之節ハ志シ次第と被仰付被下置候ハ、御百性其難涉相省可申と奉存候

一 林役廻在之節物入有之、漆爪、林指紙等申請候節難涉有之、及迷惑ニ候趣御聞及御尋ニ御座候

乍恐当村ニ而ハ是迄左様之儀も無御座候、弥々此末御役木ニ被仰付候故、取扱見不申内ハ何れ難相知奉存候、当村之儀ハ林取立候場所も無御座候得共、是迄指紙等奉願上候事も無御座候

一 御検地役人共、銀錢又ハ品物等指出候ニ付、物入有之及迷惑ニ候趣(御聞及御尋ニ御座候)

先年ハ其村不相応之申掛ケ等も御座候得共、近年ハ嚴重之御吟味被成下候ニ付、左様之儀も無御座候、尤御下々ニ寄り無心之申掛ケ等も御座候得共、御用ニ寄り老人江百文、貳百文、三百文迄酒代指出申候

一 能代下代役人山廻り之節、取扱難涉有之、随而物入有之、致迷惑候趣御聞及御尋ニ御座候

当村之儀ハ御伝馬郷ニ而、舟、借馬共ニ相勤、其上草刈場所一切無御座村居之事故、上ミハ十二所支配大滝平内沢江道法り三里余、下モハ向黒沢摩当村之内迄道法り五里程之所、右草ハ舟ニ而斗り取配り仕候故、

折々舟木奉願上、多クハ長木沢之内ニ而被下置、右舟取出し申候所ニ能代々下代衆木取木伐川下シ惣仕廻迄、御付添被成候故、別而御小屋拵、其上歩勿時取扱役人付置、水風呂拵、御賄等迄仕候ニ付、少人物入ニ御座候而、御百性共甚々迷惑仕候、乍恐ケ様之節ハ御山守并ニ麗郷江御吟味筋被仰付被下置候得ハ、御百性共難渋相省可申と奉存候当村ニ不限関根関筋等之諸材木奉願上、申請木取仕候而、右之通り之取扱ニ而迷惑仕候御儀ニ御座候

御ケ条書ハ前書之通、其訳書入候而当村無事、又は不相動候事ハ御ケ条毎ニ其段御答可書附候

外二

一乍恐御老様御替り被遊候度毎、村々江御合判御渡被遊候節、御役人様御兩人宛御廻在ニ付、御賄并御酒代御老人江式百文、三百文、四百文迄御取扱遊候而、何共迷惑千万ニ奉存候間、此已後御渡被下置候は、御代官様村々江御渡被下置候得ハ、御百性共難渋相省申候儀ニ奉存候

一御郷役、五斗米代、御伝馬代、酒役銀、惣而之上納銀、兩替屋ニ而掛合、猶又手前天秤ニ而掛合上納ニ持參仕候得共、御金掛ケニ寄り式百目包つニ付、老刃四五分、式刃斗つ、掛ケ減り有之、迷惑仕候間、左様無之様ニ被仰付被下候得ハ、御百性共難渋相省申候儀ニ奉存候

一村々関根関筋川除御普請之節、御檢使様御脚被成下候以後、御普請出来中跡御檢使様被付置候ニ付、右御普請中御賄歩勿時、其外御酒代等之失墜有之、甚々御百性共迷惑千万ニ奉存候、右御普請之儀ハ、乍恐銘々御田地水元、又ハ御田畑江欠込等之御普請ニ御座候故、御脚被成下候外ニも、杭柴人足等ニ不少人増ニ而、随分堅ク普請仕候間、此末右跡御檢使様御免被成下、御普請出来次第御檢使様御廻在御序成共、又ハ御代官様御廻在御序成共、御見分被成下候様ニ被成下候得ハ、御百性共難渋相省申候儀ニ奉存候

一御所持御場所ニ被成御座候御足輕様衆江、近年無残り御知行ニ而被下置候ニ付、右御知行当分ハ符人付ニ而相渡候所ニ、僅之御用有之候而も、小頭之方御足輕衆兩人宛御廻シ、其度毎御昼食酒等指出シ、又御泊り

被成候而も御物成引米ニも不罷成迷惑仕候、乍恐年中之内ニ御足輕衆兩人宛廻在被致候所ハ例年相替候事も無之、符人名寄七取ニ參候、又何時ハ小役銀上納仕候様ニ何時ハ物成上納致候様ニ、又何日ニ御皆済ニ參候様ニ、其外小頭衆之不幸等、小頭衆替り等、御組頭様御替り等之御様年中ニハ数度之御廻在ニ而甚々迷惑仕候、扱又凶年之節、御毛見等願申上候而も、五七度ニ及願相叶候而も、夫ハ小頭衆一兩度作毛御見分被成候而、又夫ハ御所持、御組下夕御檢使様上下六人、外ニ小頭衆御附添ニ而見分被成下候得ハ、多クハ御賄潰ニ罷成り甚々迷惑千万ニ奉存候、依テ乍恐足輕前ハ古來之通御米蔵出しニ被成下候得ハ、御百性共難渋相省申御儀ニ奉存候

一御城下ハ參候下町之穢多共、毎年籠米として老人者之水吞共、日々之渡世も漸々暮シ居候もの共も鍵さい泊居候得ハ、家吉軒之内ニ老人三人借屋仕居候而も、無残りかき当テニ米老升つ、取立申候ニ付、甚々迷惑仕候、万一右老升之米仕度致兼候得ハ老つ所持仕候鍋ニ而も被取申事故、種々之才覚仕相渡申候、万一右米才足ニ及兼候得ハ准隱申候ニ付、其節ハ役所へ申出、彼是ねたれかましく申候ニ付、纏之米ニ而御苦柄奉申上候にも恐多ク奉存候故、郷中ニ而并相渡申候類数多有之迷惑仕候間、乍恐此末屋敷ニ付老軒屋敷ハ米三升、半軒屋敷ハ五合宛指出候様ニ被成下候得ハ御百性共難渋相省申候御儀ニ奉存候

一御城下并御所持御場所ニ居候穢多共之内、馬屋登りと申候而、猿ヲ引參候而、御百性共田畑之稼ニ參、女世倅等斗り居候得ハ殊之外ねたれかましく申掛ケ、米等も余計被取迷惑仕候もの共間々有之候、多分ハ支郷、又村之内ニ而も端々江參候而、左様成ル事共仕、難渋ニ及申候間、乍恐此末右猿引在々江指出不申様ニ穢多共ニ被仰付、猶御百性共江も右吟味之次第被仰付被下置候は、此末急度吟味仕申度奉存候

一御郷役、五斗米代、酒役銀、惣而之上納銀兩替致兼、錢ニ而御城下江為相登、并ニ御鷹餌鶏、是又年々為相登上納仕候節、於取場ニ人馬雇候ニ難渋、殊ニ湊町ニ而ハ役所付不致候ニ付、賃錢殊之外割増相掛り甚々迷惑仕候間、上納銀錢ニ而為集候時、又年々上納ニ為相登候御鷹餌鶏、納

明和六年南比内二井田村御答書帳について

候定日ニ銭ニ而上納仕候様ニ被成下候得ハ、御百性共難渋相省申候儀と奉存候

一乍恐右段々奉申上候儀ハ、御百性共口上ニも難申上、恐多御事ニ奉存候得共、先頃小百性共迄も被召登、御叮嚀之被仰含、誠以御百性共末々之助り御救同然、難有仕合ニ奉存候故、思慮抱りも不奉顧、是迄御百性共難渋之次第無残り乍恐奉申上候、長百性、小百性共ニ兩段ニ寄合仕、前条之通り奉申上候、又外ニも肝煎、長百性共取扱筋迷惑之儀も有之、私共方ニ難指出儀も有之候は、御役人様御廻在被遊候節、指上候様ニと郷中へ無残り申含置候間、若左様之儀も御座候は、御間届被成下度、是又乍恐奉願上候、已上

一銭何百何拾貫何百文位

去子ノ一ヶ年郷中諸入方大方ノ高、但五斗米代銀、御郷役とも内何百何拾何文位 此度書上仕候入用之分

二井田村仮肝煎

明和六年  
丑 同 勘右衛門  
同 清左衛門  
同村長百性 長左衛門

同 平四郎  
同 与八  
同 甚十郎  
同村小百性 惣三郎  
同 長兵衛

同村小百性 藤五郎  
同 翁 助  
清九郎

(あとがき)

本稿の最初の部分で、藩が親、郷単位で三人宛農民を呼びだしたことに  
ついてふれたが、本稿提出後の一九八二年十一月下旬、角館町の山本家文  
書を調査していた際、享保三年(一九一八)今宮義透の上書「時務考」写  
本中に、在國中上意を仰渡すには、「一、御城下町々庄屋町代一町々一人  
宛、并並町人二人宛御家へ被召寄、町奉行引添直々被仰渡可然事、附、在  
々も大所之町人ハ可被為呼候」、「一、在々百性ハ十ヶ村、二十ヶ村、肝煎  
老人、平百性兩人宛を被召寄、御代官引添、直々被仰渡可然事」とあるの  
を見出した。本稿の最初の部分でのべた部分に関連して、一言つけ加えて  
おく。なお今宮上書や享保期藩政の諸問題については、別に機会をみて発  
表したい。